

kaminorippo.org

付録7c：マルコによる福音書10章11–12節と姦淫における偽りの平等

このページは、神が受け入れる結びつきに関する連載の一部です。連載は次の順序で進みます。

1. 付録7a：処女、やもめ、離縁された女：神が受け入れる結びつき
2. 付録7b：離縁状 — 真実と神話
3. 付録7c：マルコによる福音書10章11–12節と姦淫における偽りの平等（現在のページ）
4. 付録7d：質問と回答 — 処女、やもめ、離縁された女

離縁に関する教理におけるマルコによる福音書10章の意味

本稿では、イエスが姦淫における男女の平等を教えた、あるいはユダヤ社会の文脈で女性の側から離縁できると教えたとする、マルコによる福音書10章11–12節の誤った解釈に反論します。

質問：マルコによる福音書10章11–12節は、イエスが離縁に関する神の律法を変えた証拠ですか。

回答：証拠ではありません。それどころか、証拠と言うには程遠いものです。マルコによる福音書10章11–12節でイエスが、（1）女性も姦淫の被害者になり得る、（2）女性も夫を離縁できる、と教えているという考えに対する最も重要な反論点は、そのような理解が、この主題に関する聖書全体の教えと矛盾するという事実です。

神学的釈義における不可欠な原則は、いかなる教理も、ただ1つの聖句を根拠に築いてはならないということです。霊感を受けた他の書物や著者が述べていることも含め、聖書全体の文脈を考慮する必要があります。これは、聖書の教理の健全性を保ち、文脈から切り離された解釈や歪められた解釈を防ぐための基本原則です。

言い換えれば、マルコによる福音書のこの一句から引き出される2つの誤った理解は、あまりにも重大なものです。それを根拠に、ここでイエスが、族長たちの時代以来、神がこの主題について教えてこられたすべてを変えたと、私たちが主張することはできません。

もしこれが本当にメシアからの新しい教えであったなら、他の箇所にも、それもより明確な形で記されているはずです。とりわけ、離縁という主題が取り上げられた山上の説教に記されているはずです。次のような言葉があったことでしょう。
「昔の人々に、『男は自分の妻と別れて、別の処女かやもめと結婚してもよい』と言われたのを、あなたたちは聞いている。しかし、わたしはあなたたちに言う。もし彼が自分の妻と別れて、別の女と結びつくなら、彼は最初の妻に対して姦淫する……」

しかし、言うまでもなく、そのような言葉は存在しません。

マルコによる福音書10章11–12節の釈義

マルコによる福音書10章は、**文脈に大きく依存しています**。この箇所が書かれたのは、ごくわずかな規則の下で離縁が行われ、男女のどちらからも離縁できた時代です。これは、モーセやサムエルの時代の実情とは大きく異なります。洗礼者ヨハネが投獄された理由を考えてみるだけで十分です。**これはヘロデの時代のパレスチナでした**。族長たちの時代のパレスチナではありませんでした。

当時、ユダヤ人は、結婚、外見、女性の権威などに関する事柄でも、ギリシア・ローマ社会の慣習から強い影響を受けていました。

どのような理由でも離縁できるという教理

ラビ・ヒレルが教えた、どのような理由でも離縁できるという教理は、ユダヤ人男性に加えられた社会的圧力の結果でした。彼らは、堕落した人間には当然のことながら、妻を厄介払いして、より魅力的な女性、より若い女性、あるいはより裕福な家庭の女性と結婚したいと望んでいたのです。

残念ながら、この考え方は今日も生き続けており、**教会の内部にも**見られます。そこでは、男性が妻と別れて、他の女性と結びついています——**しかも、その相手もほとんどの場合、すでに離縁された女です**。

3つの主要な言語的要点

マルコによる福音書10章11節の箇所には、本文の真の意味を明らかにする助けとなる、3つの重要な語が含まれています。

και λεγει αυτοις Ος εαν απολυση την **γυναικα** αυτου και γαμηση αλλην μοιχαται **ἐπ'** **αὐτήν**

γυναίκα（gynaika）

γυναίκαはγυνήの対格単数形です。この語は、マルコによる福音書10章11節のような結婚に関する文脈では、一般的な意味での女性ではなく、特に既婚の女性を指します。これは、イエスの答えが結婚の契約への違反に焦点を当てており、**やもめや処女との新たな正当な結びつき**に焦点を当てているのではないことを示しています。

ἐπί（epí）

ἐπίは、通常「〜の上に」「〜と共に」「〜の上で」「〜の内に」を意味する前置詞です。この節で「〜に対して」という訳を選ぶ翻訳もありますが、とりわけ言語的・神学的な文脈に照らせば、それはἐπίの最も一般的な意味合いではありません。

例えば、世界で最も広く使われている聖書であるNIV *(New International Version)*では、**ἐπί**の832回の用例のうち、「〜に対して」と訳されているのはわずか35回です。残りの用例では、「〜の上に」「〜の上で」「〜の内に」「〜と共に」という意味が表されています。

αὐτήν（autēn）

αὐτήνは、代名詞αὐτόςの女性・単数・対格の形です。マルコによる福音書10章11節の聖書ギリシア語（コイネー）の文法では、「αὐτήν」（autēn—彼女）という語は、イエスがどの女性を指しているのかを特定しません。

文法上の曖昧さが生じるのは、先行詞として次の2つが考えられるからです。

- **τὴν γυναῖκα αὐτοῦ**（「彼の妻」）——最初の女性
- **ἄλλην**（「別の[女性]」）——2番目の女性

どちらも**女性・単数・対格**であり、**同じ文構造**の中に現れるため、「αὐτήν」の指示対象は文法的に曖昧です。

文脈に即した翻訳

原文に書かれている内容を考慮すると、歴史的・言語的・教理的な文脈に最も整合する訳は、次のようになるでしょう。

*「自分の妻（**γυναίκα**）と別れ、別の女——すなわち、別の**γυναίκα**、すでに誰かの妻である別の女——と結婚する者は誰でも、その女の上に／内に／上で／その女と共に（**ἐπί**）姦淫する。」*

要点は明らかです。正当な妻と別れ、同じくすでに別の男の妻であった女性（したがって、処女ではない）と結びつく男は、**この新たな女性と姦淫するのです**——その女性は、すでに別の男と結びついている魂なのです。

動詞「apolýō」の真の意味

マルコによる福音書10章12節が、女性の側からの法的な離縁に聖書的な根拠を与え、それによって彼女は別の男と結婚できるという考えについて言えば、これは聖書の本来の文脈に根拠のない、時代錯誤的な解釈です。

まず、その同じ節でイエスは、もし彼女が別の男と結びつくなら、2人は姦淫すると述べて、文を結んでおられるからです——**イエスがマタイによる福音書5章32節で述べておられることと、まさに同じです**。しかし、言語的には、この誤りは、ほとんどの聖書で「離縁する」と訳されている動詞、ἀπολύω（apolýō）の真の意味に起因します。

「離縁する」という訳は現代の慣習を反映していますが、聖書の時代にἀπολύωが意味していたのは、単に**解き放つ、手放す、自由にする、去らせる**といった、物理的な行為や人間関係上の行為でした。聖書における用法では、ἀπολύωは法的な意味合いを帯びていません。これは別離を表す動詞であり、正式な法的手続きを示唆するものではありません。

言い換えれば、マルコによる福音書10章12節は、女性が夫と別れて、**最初の夫がまだ生きている間に**別の男と結びつくなら、その女性は姦淫すると述べているにすぎません。それは法的な問題のためではなく、なお有効な契約を彼女が破るからです。

結論

マルコによる福音書10章11–12節を正しく読むことによって、処女と既婚の女性を区別する聖書の他の箇所との一貫性が保たれ、ただ1つの不適切に訳された一句に基づく新たな教理の導入を避けることができます。